カワウソの鈴カステラを作ろう！

風子はキッチンで黙々と鈴カステラにチョコペンで顔を描いていた。
「うーん、ちょっと不恰好だな…」
「よぉ、風子。これ、うまそうだな。」
「あっ、アンディ！ちょっと、つまみ食いしないでよ！」
風子は作りかけの鈴カステラを一つ拝借したアンディを叱りつけた。
「すまん。うまそうだったから、つい」
「もう、勝手に食べちゃダメでしょ？これは今日の女子会でお出しするお菓子なんだから！」
「そうなのか？だったら食べた分新しく作り直すから許してくれ。」
「わかりました！じゃあやり方教えるね。この写真みたいに、鈴カステラにチョコペンでカワウソの顔を描いていくの。」
風子がとある料理雑誌を見せる。そこには、カワウソの顔が描かれた鈴カステラが一面に並べられている。画一的に見えるが、手描きなのでどことなく個性豊かで賑やかだ。
「おう。じゃあ、ちょっくらやってみるか。」
アンディはチョコペンを握ると、小さな鈴カステラの上に器用に顔を描いていく。風子は

その様子を固唾を飲んでじっと見守っている。
「よし、一つ完成！」
「おお！すごい上手だねぇ～。」
風子に褒められたアンディはドヤ顔で嬉しそうだ。風子は自分が描いたカワウソの顔と見比べたが、アンディ作のカワウソは線が真っ直ぐでよれてないし、顔のパーツのバランスも良い。
「このまま手伝ってもいいか？」
「もちろんだよ！だって私のより上手だし…」
風子は初心者のアンディに先を越されて少ししょげた様子だ。
「なぁ、風子？カワウソとお前ってなんか似てんな。」
「えーっ!?カワウソに似てるってはじめて言われた…っていうか全然似てないし、この子たちの方がずっとかわいいよ。」
「いや、お前のほうがずっとかわいいが？」
ストレートに褒められた風子の顔はみるみるうちに真っ赤になっていく。それを見たアンディは笑いながら残りの鈴カステラに顔を描いていく。
「…なんすか、あれ？」

最近ユニオンに加入したばかりのチカラは、二人で盛り上がっている様子を少し離れた場所で観察しながらタチアナに質問した。
「何って…不死と不運のコンビよ。あいつらはいっつもあんな感じよ？だから早くユニオンの雰囲気に慣れなさいよね、新人！」
チカラは色々な意味で大変な場所に来てしまったようだ…と内心思ったのはここだけの話。

【完】